

令和 7 年度 「施設の自己評価」

令和 7 年度は園児総数本園 110 名、分園 19 名の合計 129 名で始まりました。定員からすると入所率 89 % ですので全体的にはまだまだです。しかし、久しぶりに 0 歳児が本園 7 名からスタートして、最終的には本園 17 名、分園 6 名と増加できたので良い徴候ではあると思います。職員数は 34 名となり定着してきております。

年度当初に保育の全体計画・年間計画。月計画・週計画をこどもの発達に合わせて作成し、クラスの人数増加などに合わせ随時見直しをしながら保育をしていった。

行事に関してはどの行事も大きな問題はなく実施できました。しかし、暑さ対策を含め運動会の実施時期や、プール含めた園庭遊びについては対策が喫緊の課題です。来年度に向けて検討していきたいです。

園内での遊び等は、遊びを工夫し元気に活動していました。職員としては不適切保育に気を付け、こどもたちの思いや自主性を尊重し保育・教育を心がけていきました。

当園の食育活動は、園庭での野菜作りや収穫してクッキングをするなどですが、もう少し園外に目を向けて色々な活動をしていきたいです。

例年通りの季節的な病気はありましたが一部のみで広がることなく落ち着いた保育ができていました。

また、園児の大きなけがも無くこちらも落ち着いた保育ができた要因であると思います。

総体的に大きな問題はなかったが、行事や通常の教育・保育はよりこども・保護者にとって充実したものになる様に、職員一人一人がより本人の質向上に努め、質の高い教育・保育を提供できるように努力を重ねていきたいです。

令和 8 年 3 月 沼上こども園・分園園長 森下健二

令和7年度自己評価の結果と今後の課題

沼上こども園・分園

令和7年11月実施

第1章 総則

第2章 子どもの発達

第3章 「ねらい」および「内容」

子どもが楽しく食べることができるように、食育として保育に関連の教材を取り入れるなどの工夫ができたか、また、表現の楽しさに気づかせる工夫や音楽に親しみを持ち楽しめる工夫ができたか、生活の中で、数量や図形、自然や身近な事象に関心が持てる工夫ができたかといった設問に対して、あまりできていないと答える人が多かった。

食育に関しては、行事や一時的な活動に偏り、子どもが日常的に食に関心をもつことを深められる環境の工夫がたりなかった点も課題の一つであると思う。行事や毎年行っている食育栽培活動も充実させつつ、例えば毎日の給食に使われる食材について、興味関心を持たせるような工夫など小さな食育を毎日取り入れることからでも子どもの食への興味は広がるのではないかと思う。

表現に関しては、表現は子ども自身が感じたことが材料になることを考えると、やはり心が動く経験を増やして、感じた⇒表したいに繋がる工夫をたくさん保育の中に取り入れていくことも必要ではと考える。

数量や図形、自然や身近な事象への関心は、教えるより子どもたち自らの気づきから生まれるもので、毎日のあそびや生活の中で、子どもたちが自分から知りたい、やってみたいという気持ちになるような環境作りをもっと工夫しなければいけないと思う。

園全体の保育の質を高めていく体制を整えていく必要があると感じた。

第4章 低年齢児の保育実施上の配慮事項

第5章 指導計画作成に当たって配慮すべき事項

第6章 研修と自己評価

自ら研修に積極的に参加できなかったことや、自己評価などで課題を見つけ、その課題の解決のために計画的に自己研鑽できていない人も多くいた。

この項目も毎年低評価である。1人ひとり自己課題をもっと具体的に明確にし、日々意識をし、その解決に向けて努力が必要だと思う。

今後の課題

自己評価の結果、毎年同様の課題が繰り返し見られている現状が明らかである。大きな改善を求める前に、職員一人ひとりが日々保育の中でできる小さな改善を意識し、それを継続して取り組むことが必要だと思う。園全体でその改善の積み重ねを共有し、学び合えるような体制を作っていければと思う。それが保育の質の向上につながればと思う。

今後の課題に向けて

日常の保育の中で学び合える環境

- ・週間や乳児会議、幼児会議の中で振り返りの習慣化⇒成功事例の共有(うまくいった関わり・声のかけ方・環境構成)
- ・表現、食育、数量、図形、自然、身近な事象に関しての保育の工夫⇒日常の保育の中で子どもが楽しんでいた、興味関心を持っていることを発表し、保育者が、それにどう関わり発展させていったのかも共有する
 - *良かった関わりを1事例順番で発表
 - *園内での公開保育
- ・特別な活動を取り入れるのではなく日常の保育を意識して充実させるために、声かけや関わり方を共有することで、1人ひとりの保育への意識づけの向上を図る
- ・表現でいえば、例えば発表会の練習中、合唱、合奏、オペレッタで子どもが一番楽しんでいたのはどこか？上手になることより、表現する楽しさを感じていたと感じられる子どもたちのことば、表情、態度をピックアップして、そこに保育者としてどう関わったかなど事例を共有
- ・月初め特に大事にしたいことや、やってみたいことなど各クラスごと決めて発表する
- ・月終わり特に子どもの心が動いたと感じるできごとなど各クラスごと発表する
- ・職員一人一人が、保育の中でこれだけはやってみる、改善することを決め共有し、実践できたか振り返りも行う⇒自己評価の具体化
- ・週案のねらいを具体的に掲げ、保育内容、振り返りも、ねらいに沿って具体的に記入するよう意識する

園長からは

- ・例えば・・・

月案の作成の復活 月案を作成するということは、単に予定を立てることではなく、子どもの姿、1人ひとりの子どもの成長、そこに向けたねらいや環境構成や援助の仕方を考え、見通しをもたせること

子どもの発達には毎年そうは変化はしないということで、固定したものになったが、職員1人ひとりの保育の質の向上という反省が毎年改善の方向に向かないのであれば、これも一つの案として実行せざるを得ないのではないか

- ・教育・保育要領の読み合わせ